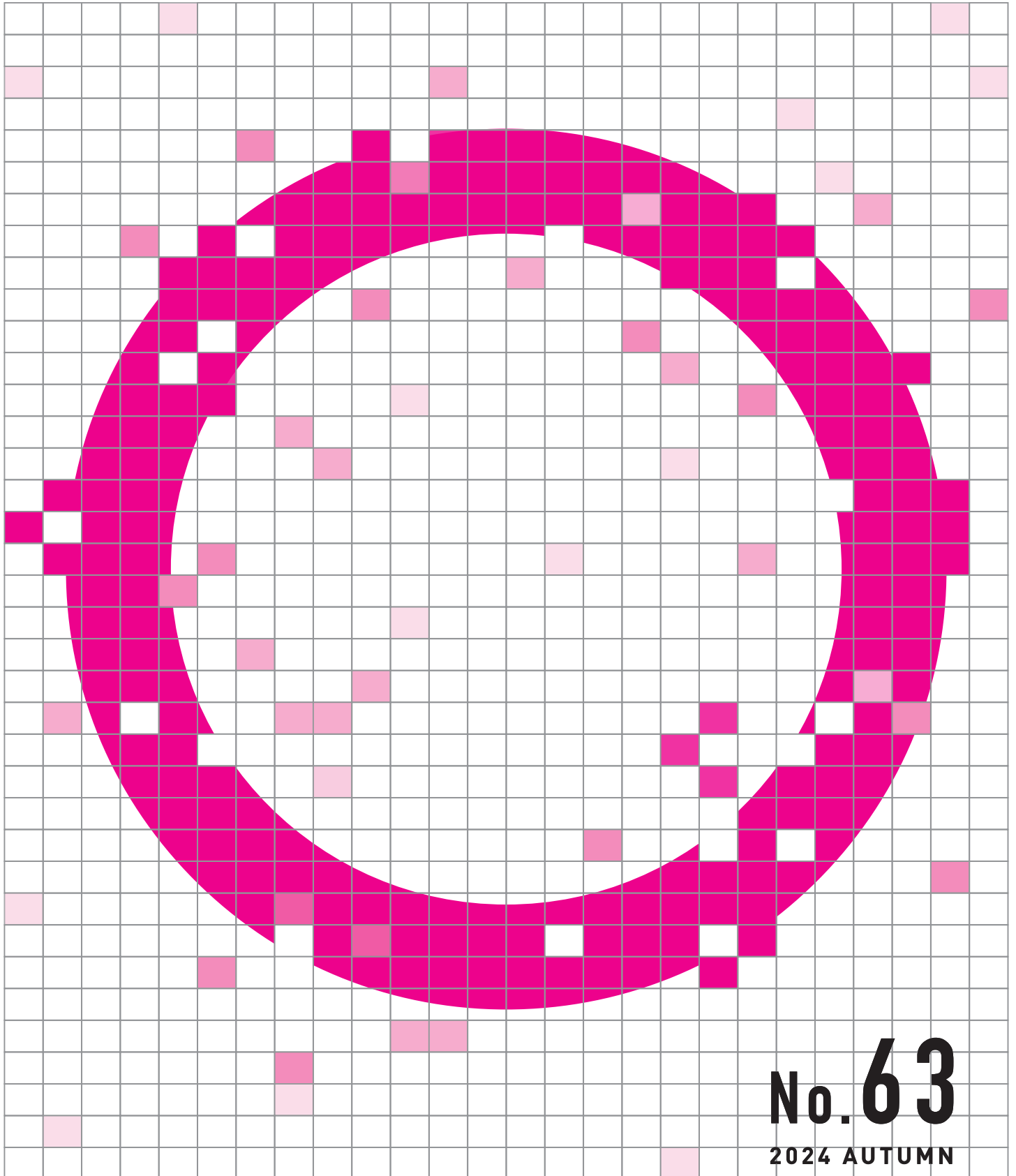


GAKKAN

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies, The University of Tokyo



No. 63
2024 AUTUMN

格差のない情報や人の流れを目指して

澁谷遊野 准教授

社会情報学コースで社会情報・空間情報科学のご研究をされている澁谷遊野先生のインタビューです。
これまでのご研究の経緯や最新のお取り組みについて伺いました。



——— 澁谷先生が今回、情報学環に着任されるまでの大まかな経歴をお聞かせください。

私は、学際情報学府の社会情報学コースで修士号、博士号を取得しました。同時に博士課程教育リーディング大学院プログラムも修了しました。そのプログラムは工学系研究科を主体に学部横断型で所属や研究室を越えて研究をするものでした。その後は、情報学環での特任助教、空間情報科学研究センターでの研究従事を経て、このたび機会をいただきまして、古巣であります社会情報学コースの方に戻ってきたという形になります。

——— 学部生の時はどういうお勉強をされて、その後大学院に進まれたのでしょうか？

学部は文学部哲学専攻で学び、卒業後は地元の宮城県で4年間働いておりました。ちょうどその時、東日本大震災があり、仕事や日常生活の中でも、情報流通の格差や、デジタルの活用の遅れ、コミュニティによる復興の差異などの事象に遭遇し深掘りしたい研究課題がいくつか出てきました。そうしたこともあり、東京大学の学際情報学府に入学し、そのまま研究をしているという経緯になります。

——— 元々哲学を勉強されていたということで、そこから工学的な解析とかモデリングされたっていうのはすごいキャリアのチェンジだと感じたんですけれども、そこについて何か壁とか大変なこととか御自身の認識として何かありましたか。

元々中高の時からずっと、大学に行くなら哲学と思っていました。一見異なるようにも見えますが、一方で、根本的な考え方やアプローチには工学的な研究とも共通点もあると感じています。また、データにも関心があったため、先ほど紹介した博士課程教育リーディング大学院などを通じて、どっぷりと工学系の授業を受講したりプロジェクトに参加したりしました。もちろん大変なこともあったかもしれませんが、それにも勝って、やはり楽しかったり、自分で書いたコードがうまく動くと、すごく嬉しいとか、そういう単純な積み重ねがあって、気が付いたらデータの解析を中心とした学際的な研究を扱うことが多くなりました。自分の中でキャリアがブツツと切れているという感覚はないです。根本的

に、学問において問うものは、アプローチは違っても、似たようなものも多いと思います。そういう意味ではこの学環で学際的に色々研究する人と出会ったことや、博士課程教育リーディング大学院で、分野や産学の壁を越えて研究や勉強に取り組んだことは大きな経験です。

——— 現在の澁谷先生の研究テーマについてお話しください。

現実世界とデジタル世界の両方での人や、モノ、情報の流れをメインの対象として研究をしています。情報の流れや人の流れを、特に私の場合はその多様性とか異質性、格差という観点から見ています。

例えば、実空間での人の流れ、人流データですね。どういう人がどこからどこに移動して、どのような環境との接点があるのかといったことの解析や、行動変容のシミュレーションに取り組んでいます。都市空間での人の流れの分析を行うと、例えば、朝起きて、家を出て出勤して会社に行って、また帰ってくるみたいな典型的な人の動きというのは大体説明や予測できます。一方で、典型的なところに収まらない人や行動、例えば、在宅勤務や、ちょっと今日は気分がいいから公園散歩してみようとか、新しい店を覗いてみようとか、そういう探索性やセレンディピティー的な出会いといった行動は多様で予測が難しくなります。こうした非典型的な行動などに着目して研究に取り組んでいます。

もう一つ多様性という観点でいうと、自分と異なるタイプの人と、人々はどうのくらい会う機会があるのかということを計量化したり、シミュレーションするという事を行っています。例えば貧困層の人や富裕層の人、高齢者や若い人、外国にルーツを持つ人などがそれぞれが孤立してしまわないで、どれくらいお互い交流する機会があるのか、あるいはそういった交流を促すには、都市全体としてどういうデザインや介入が必要なのかということデータを介して、解析したりシミュレーションするということをしています。

デジタル空間での情報の流れに関する研究でも考え方は似ています。フィルターバブルという言葉もあるように、同じような情報にばかり触れる傾向がある中で、情報の流れに偏りがおこらないような環境や、多様な情報に触れるような環境を確保するためにはどのようなことが求められるのかなどについて検討しています。昨今の例だと、偽誤情報や詐欺や、災害時のコミュニケーションなども対象にして研究を行っています。元々は災害時のコミュニケーションデータを解析する中で、情報の偏りや偽誤情報が目についたというのがきっかけです。

——— 先生の今のご研究の根幹部分は、やはり東日本大震災において実体験された情報に関する事象があるのですね。今後、学生には、どんなものを求められますか？また、情報学環で学生という学府の院生を経て、今学環の教員としていらっしゃる立場で、学環・学府への思い入れはありますか。

学生の皆さんには、批判的な思考の観点も持ちつつ、探求力と継続力を持って、何か面白いと思うことや関心のある課題に打ち込んでいただければと思います。学生時代の情報学環は、色んな機会・挑戦する方には、どんどん機会をくださる、背中を押してくれた場所だと思っています。

インタビュー：畑田裕二(助教)、柳 志政(博士課程)

インタビュー&構成：原田真喜子(特任助教)、山内隆治(学術専門員)

写真提供：澁谷遊野(准教授)

〈取材日：2024年7月2日〉

令和6年度大学院学際情報学府 入・進学ガイダンス

2024年4月4日(木)、当年度4月に大学院学際情報学府に入学・進学した修士課程102名、博士課程42名を対象に、入・進学ガイダンスが福武ラーニングシアターにて行われました。

はじめに、この4月から学際情報学府長に就任された目黒公郎教授から祝辞が贈られました。目黒学府長から新入生へのメッセージとして、人生は学生の立場で想像しているよりもはるかに短いため、大学院生としてのできる限りの時間を活かしてやりたいことに取り組んでほしいこと、社会に出てからも役立つ武器として、ここでしか出会えない仲間を作ってほしいことなどが伝えられました。

続いて、専攻長の苗村健教授から、学際情報学府での研究の進め方に関する説明がありました。また、学際情報学府で研究活動を進める際の心構えとして、学際情報学府の優れた特徴である《学際性》を活かすため、この組織に集まる様々な人と積極的に交流してほしいということが強調されました。

記事：中野知也(学務チーム)

令和7年度東京大学大学院 学際情報学府の入試説明会

2024年5月11日(土)、福武ホール地下2階ラーニングシアターにて、2025年度東京大学大学院学際情報学府の入試説明会が開催されました。説明会では、情報学環・学際情報学府の全体像が紹介されるとともに、各コースの説明や入試出願に関する具体的な説明が行われました。コロナ禍以降、初めての対面での説明会だったこともあり、会場は満席となり、急遽場外のサテライト会場が設置されるほどの大盛況となりました。司会を務めた暦本純一教授の挨拶に続き、学府長である目黒公郎教授が登場しました。その後、各コースのコース長が順番に登壇し、具体的な事例を交えながら各コースの研究内容と教育方針について説明しました。後半のセッションでは、各研究室のポスター展示が設けられ、参加者は各ブースを回りながら、興味のある研究室や研究テーマについて教員や現役大学院生と対面で議論することができました。

記事：畑田裕二(助教・編集部)



Creative Futurists Dialogues 001 『越境的未来共創に向けて』

2024年4月23日(火)、工学部2号館9階92B教室にて、越境的未来共創社会連携講座Creative Futurists Initiativeによる第1回トークイベントとして、Creative Futurists Dialogues 001『越境的未来共創に向けて』が開催されました。

Creative Futurists Initiativeは、2023年12月に設置された社会連携講座であり、批評分析的アプローチとアート・デザイン・工学を通じた創造的アプローチを両立させることで、社会課題の提起および解決を目指しています。この講座では、大学院学際情報学府を中心とした学生とソニーグループ株式会社の社員が実践的な研究活動の展開に取り組んでいます。

本イベントでは、寛康明教授による講演とソニーグループ株式会社の戸村朝子氏をモデレータに迎えた対話を通し、分野を超えたコラボレーションによる価値創造と越境的未来共創を導く人材像について共有いただき、参加者同士の交流と質疑が行われました。

記事：香川舞衣(博士課程)



UTalk: 大学と地域をつなぐカフェイベント

情報学環・福武ホールでは毎月第二土曜日にカフェイベント『UTalk』を開催しています。会場は福武ホール内にあるUTカフェ・ベルトレールジュ。毎回、東京大学の教員一名をゲストとして招き、一般参加の方々と共に研究について話を聞いたり、おしゃべりしたりする集まりです。2008年の福武ホール竣工時より開催しており、2024年7月で第196回を迎えます。

UTalkのような実践は教育学から見れば大学開放としての「公開講座」の一種となり、科学コミュニケーション論から見れば「サイエンスカフェ」の一種となります。その中でもUTalkの特徴は「人を知ってもらうこと」にあると考えています。そもそも福武ホールという建物自体が赤門のすぐ脇にあり、大学と地域の境界に位置しています。その中でUTalkも大学と地域をつなぐカフェイベントとして末永く開き続けていきたいです。

記事：杉山昂平(特任研究員)

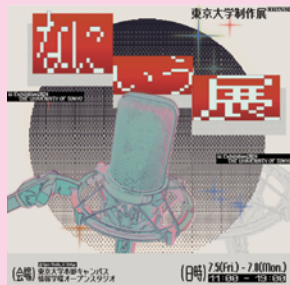


東京大学制作展2024 Extra 「なにいう展」

2024年7月5日(金)から8日(月)までの4日間にわたり、東京大学制作展2024Extra「なにいう展」を情報学環オープンスタジオにて開催しました。今回のコンセプトには、鑑賞者が作品に対して「これは何を言っているんだろう?」と純粋な疑問や興味を向けてみてほしいという願いが込められています。猛暑や大雨に見舞われたにも関わらず、本展示会には多くのお客様がご来場してくださいました。

さらに、今年度からは「東京大学制作展クリエイターズ基金」を立ち上げ、寄付を募ることになりました。これまで作品に関する物品は学生たちが自費で購入したり、制作展関係者からお借りしたりしていましたが、物価の高騰や大学からの予算削減に伴い、万全な体制で活動を行うことが難しくなっております。東京大学制作展に真剣に取り組む学生たちに向けて皆様からご支援をいただけたら幸いです。

記事: 都築あい(修士課程)



北海道ホタテ産業実態調査

2024年7月15日(月)から18日(木)、開沼研究室が主催し北海道ホタテ産業実態調査が実施されました。前年8月より開始された東京電力福島第一原子力発電所からの処理水海洋放出による経済・社会的影響が最も大きかった北海道のホタテ産業について、聞き取り、現地視察を通して検証することが本調査の目的でした。学際情報学府の学生を含む6名が参加し、北海道新聞社のご協力のもと、主要産地であるオホーツクエリアと噴火山エリアにおいて、複数の漁業者・加工業者・漁業協同組合を訪問しました。参加した学際情報学府修士課程1年の洪璋廷さん(山口つ子研究室)は「実際に現場に行くことで、知見を最大限に引き出すためには、どの組織の誰に何を質問するかを想定し、その場の文脈を考慮しながら問題を提起することの難しさを実感し勉強になった」と語りました。今後、開沼研究室では、調査結果を学会報告等で公表していきます。

記事: 開沼 博(准教授)



CONGRATULATIONS

令和5年度 大学院学際情報学府 学位記伝達式

2024年3月21日、学際情報学府の学位記伝達式が福武ラーニングシアターにて開催されました。今回の学位記伝達式では、2018年度以来となる対面での実施となりました。修了者修士課程94名、博士課程14名に山内祐平学府長より学位記が伝達されました。その後、山内学府長と苗村健専攻長より祝辞が贈られました。(先生方の肩書きは当時のものです)



学生に学位記を伝達する
山内祐平学府長

令和7年度 修士・博士課程合格発表

2024年8月27日、令和7年度修士・博士課程(夏季募集・2025年4月および2024年10月入学)の合格発表がありました。出願者数は修士課程259名、博士課程17名でした。最終合格発表者は表の通りです。

修士課程最終合格者数	
社会情報学コース	9名
文化・人文情報学コース	11名
先端表現情報学コース	26名
総合分析情報学コース	9名
生物統計情報学コース	7名
合計	62名

博士課程最終合格者数	
先端表現情報学コース	1名
総合分析情報学コース	2名
合計	3名

記事: 柳 志暁(博士課程・編集部)



学位記伝達式で
祝辞を贈る苗村健専攻長



学位記受け取り代表者
安本真也さん(博士・右)
高下修聡さん(修士・左)



なぜ東大は男だらけなのか

矢口祐人 (著)

発行年月: 2024年2月 出版社: 集英社

東大学部生の女性・男性学生比率は2:8(大学院生も日本人に限れば同じです)。教授は1:9。どう考えても、望ましい教育研究環境ではありません。

本書はこの強固な男性中心の大学がどのように作られ、強化されてきたかを歴史と国際比較の観点から考察します。「男だらけ」ではない、多様性を包摂するキャンパスを目指すための提言です。(矢口祐人教授)



2035年の人間の条件

暦本純一/落合陽一 (著)

発行年月: 2024年5月 出版社: マガジンハウス

テクノロジーの急激な変化に、私たちはどう備え、どう行動すべきか。情報学環卒業生の落合陽一さんとAI時代に必要な知性や社会の未来を語り合いました。2035年までに変化する社会や人間像は? その一方で変わらないものもあるはずです。話題は情報科学・AIから仏教・老荘思想まで多岐に渡ります。(暦本純一教授)



世界の岐路をよみとく 基礎概念

中溝和弥/佐橋 亮 (編)

発行年月: 2024年6月 出版社: 岩波書店

『世界の岐路をよみとく基礎概念』は、比較政治学や国際政治学を学ぶ学部上級生や大学院生向けに、民主主義や国際秩序、さらに暴力や軍縮など、重要な概念を体系的に解説したものです。各章では、最新の議論や関連文献も紹介し、さらに学びを深める手助けをします。政治学の基礎を学んだあとに、複雑な政治課題に挑むための参考書として最適です。(佐橋 亮准教授)



学府の社会人学生

——働きながら研究する経験をめぐるアンケート結果より



フルバージョンはこちら

近年、業務上必要な新しいスキルを獲得すること、あるいは新たな職業に就くために必要なスキルを獲得する「リスキリング(reskilling)」が注目されていますが、実務経験を持ちながら大学院生になることもリスキリングのひとつの形かもしれません。学際情報学府には、学部卒業後に就職し社会人経験を持つ人が一定数在籍していますが、どのような考えや思いを持って院生生活を送っているのでしょうか。編集部ではコース横断的に声がけした7名の社会人学生の方からアンケートで意見を集めました。そこからは多くの方が実務経験を活かしながら研究に向かう様子が伺えました。

※こちらでは質問/回答の一部をご紹介します。フルバージョンはウェブをご覧ください。

Q1: あなたはどういった理由で大学院への進学を考えましたか?

回答者の多くが大学院を目指そうと考えたのは、やはりそれぞれの現場で日頃業務にあたる中で見出した問題意識がきっかけとなったようです。また、キャリアチェンジを意識して大学院進学されたそうで、今後の人生を見据えた中での決断であったという声もありました。

Q2: 社会人経験をへて大学院で研究することの良さはどんなところにあると思いますか?

この問いには、実務経験を通じて見出した研究テーマが社会にどう活きるか・活かせるかを見据えていることが伺えるコメントがありました。ほかにも、社会人生活で培ったメンタルの強さが大学院生生活を送る上で役に立つという意見や経済的な安定のおかげで研究に専念できるという声がありました。

Q3: 社会人大大学院生ならではの苦労はどういうときに感じますか?

このアンケートに回答された方7名のうち5名が仕事を続けながら大学院生をしています。共通して聞かれたのは、仕事の時間的拘束からくる研究時間の確保の難しさです。ほかには、学部卒後大学院へ進学した学生との距離感に戸惑いを感じる声や経済的な不安や貯金の減少なども聞かれました。

<https://www.iii.u-tokyo.ac.jp>

【あとがき】

私が情報学環教育部と学際情報学府の学生だった15年ほど前と、教員の現在と、見える学環・学部風景は様々に違います。コモンズの机には図体の大きなAppleのデスクトップPCがズラッと並び、総合図書館や本館の1階はもっと薄暗い感じで、赤門・正門は深夜でも開放され遅くなくても帰りやすかったり。教員としては3年6ヶ月。大学運営の裏側をまだ半分、社会科学見学のような気持ちで観察しているところもありますが、本格再開しつつある入試の筆記試験、これは大変な負担だったんだな、などと改めて気づきます。あの頃からあったUTalkが200回目を迎えようとしています。変わらぬ風景を継続してつくる方々の努力には感服するばかりです。(開沼 博)

GAKKAN 63 2024.10

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies and Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1 mail: news@iii.u-tokyo.ac.jp

編集委員: 開沼 博、原田 真喜子、畑田 裕二、山内 隆治、柳 志岐

デザイン: マルヤマデザイン(丸山智也、野中優衣、門脇妃南)